学生のページ

土木系学生会

■土木系学生会について

■大学めぐり 第3回 〝九州大学の巻〟

土木系学生会について

伊藤　学

土木系学生会も関東，九州などの各地区において次第に組織化され，すでに報告されたように昨夏には全国集会が開かれるまでにほぼ順調な成長を続け，またこの学生のページも土木工学を専攻する学生諸君の交流の場として活用され続けてきたことは同慶の至りである。

土木学会には以前から学生会員のための映画会というものはあったが，これが多少形式的に流れてきたように思われたので，学会に学術講演連絡委員会が設置されたのを機会に，学生諸君の意見もとりいれて学生のための催しを幅広く考えることになったのが，土木系学生会を生み出すそもそもの発端であった。以来上記委員会の中で私がその面の担当を仰せつかり今日におよんでいるので，これがおそらく本欄に何か一筆書くようにと学生会幹事から依頼された理由であろうと思う。しかしこの3年近くの間，土木系学生会に対して払われた学術講演連絡委員会の林　泰造委員長（中央大学教授）のご理解ある配慮とご尽力を忘れてはならない。ここでは従来の経緯をふりかえって，学会と学生会の関係，土木系学生会の将来などについて上記委員会の一員であるという立場を離れて私見を述べたい。

私としては土木学会が土木技術者の卵である学生員のために，アメリカの土木学会（ASCE）あるいは日本機械学会におけるように，学生組織を学会の下部機関としてもつことを主張してきた。それは，やはりわれわれの学会は土木工学を専攻するすべての人達の組織であると考えるからである。その場合には当然すべてを学生諸君の手に任せるというのではなく，ASCE におけるように相談役あるいは監督的存在の委員会が設けられることになろう。しかしながら，学会の財政基盤が主として会員の会費に依存する以上は学会当局としても実現に踏切るにはなかなか困難があるようにうかがえるし，現在のところ学生員が土木系学生のすべてではないことにも問題がある。このことに関しては，私は土木系学生諸君が一人でも多く学会に入会されることをすすめたい。他の土木関係の専門雑誌が概して学生向きのものではないだけに，学会誌に接するだけでも大きな利益であると考えられるし，土木系学生会を学会に近付けるためにも望ましいことである。現在の土木系学生会は一応学会とは直接のつながりはない形になっているが，幹事役の学生の新陳代謝の早いこと，地域同士のつながりもなかなか保ちにくいことから，将来その運営が頭打ちになったり衰微することを恐れる。以前本欄に紹介されたアンケートにもあったように，この会の存在が必らずしも多くの学生諸君に認知されているとはいえないし，またその活動が全体から見ればごく一部の諸君のみに限られる傾向のあることは否めない。私がもっとも気にしているのは，以上述べたように活動的な幹事が交代したことによって，学生会そのものの動きに大きな波が生じること，および運営が一部の幹事役の学生に限られて大多数の人達は無関心になることである。会の運営にはこの点に留意していただきたいと思う。

それとともに，おそらく多くの人達が望んでいるのは，全国的な連携をもたせるようにすることであろう。もちろん旅費などに苦労する学生の間ではたびたび顔を合わせることもむずかしかろうが，現在その機運もあり，また一部実現に移されているごとく，まず各ブロックごとに会の運営を進め，そのうえでせめて各地域間の情報交換ぐらいの程度にまで拡げて行ければと考える。将来は高校の土木系生徒あるいは大学院生（これはすでに数年前から異なる面からではあるが組織がある）とのつながりも考えてしかるべきであろう。

つぎに財政上の問題では学会からの援助も現状では僅少に留まらざるをえないからといって，特定の寄附を仰ぐのは避けるべきである。自分達の活動に役立てるならば，やはり適当な会費で運営する方が一般学生の関心も高まろう。

すでに学生の間で独自に会の運営がされているわけで

あるが，会合を重ねるにつれて幹事役の学生諸君はある時点において適度のネゴシェーションも必要であり，協調性を要求されることが認識されてきたことと思う。比較的自由を満喫してきた学生諸君にとっては，これは社会に出る前の良い経験である。多くの人達が集まって何かをしようとするとき，その人達の意見が常に一致することはありえないから，結論を出すためには柔軟な考え方のもとに良い意味での譲歩があるのは当然である。将来学会との結びつきを考える場合にもそれは必要で，便宜ははかってもらいたいが口は出してくれるなでは事は成就しえない。またできるだけ広汎な関心をうながすためにも，それぞれの具体的な仕事はなるべく多くの人々に参画させるのも一法であろう。

終わりに，重ねて学会当局あるいは学会の枢機にある諸先輩には，先に述べたような障害はあるにしても，将来の担い手になる学生員，さらには土木系学生全般に対して，学会がもっと積極的な施策をとられることを希望したい。いろいろさしでがましいことを述べたが，土木系学生を創立当初から見守ってきた者として，自分では一種の介添役あるいは弁護人のつもりで私見を並べてみたつもりであり，学生会が今後とも発展を続けることを願うものである。

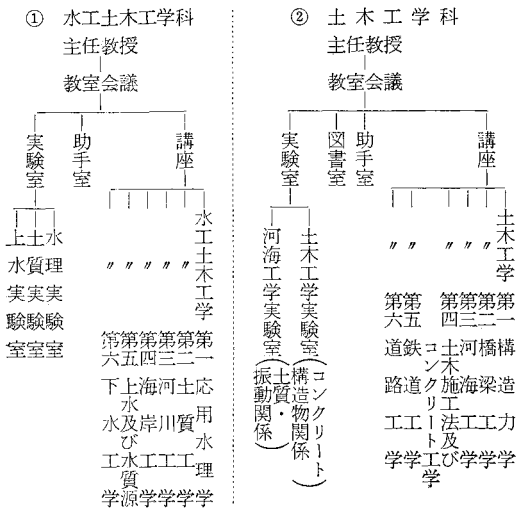
(筆者・正会員　東京大学助教授，
土木学会学術講演連絡委員会委員)

九州大学の巻

九州大学工学部土木系学科（土木工学科，水工土木工学科）の紹介をさせて頂く。

九州大学の沿革をごく簡単に記すと，まず明治 43 年 12 月に九州帝国大学として発足したが，これより先，既設の東京，京都両帝国大学の他に九州の地に帝国大学を設置しようという気運が高まり，明治 36 年京都帝国大学の一分科として，京都帝国大学福岡医科大学が設置され，後の九州帝国大学の前身となったのである。工学部は明治 44 年九州帝国大学工科大学として創設され，大正 8 年九州帝国大学工学部と改称，さらに昭和 22 年 10 月現在の九州大学工学部となったのである。土木工学科は工学部創設当時より設けられたが，水工土木工学科は昭和 38 年に新設された。さてつぎに二学科の様子を紹介しよう。

図—1



まず学科運営の機構図を 図—1 に示す。

機構について概略を述べると，学科の主体である講座は 6 つの研究部門にわかれており，各講座の構成は，教授 1，助教授 1，助手 2，雇員 2～3 である。水工土木の方は新設間もないため，完全にこの機構が整っていないが，今春には，教授陣の充実を計ることになっている。

助手室は学科全般の事務処理，図書室は図書雑誌の管理を担当する。

なお現在の講座の中には，時代の要望に合致しない編成のものもあり，これを改善することや，実験室を各講座ごとに設けるなどの体質改善の課題があることも付記しよう。

つぎに水工土木工学科のあらましを述べてみる。

講座内容を比較してみてわかることと思うが，ともかく「水」に関する土木工学の分野についての研究を主体として成り立っている。しかしながら，土木技術者養成としては何ら他の土木工学科と変わるところがない。

水工土木工学科新設の理由を考えると，まず土木方面の大学卒業生の需要が増えてきたこと，他大学で講座増設や関連学科新設により，先生，学生の数が非常に増えたこと，技術内容の細分化，専門家による質的面での不備を補なうことを余儀なくされたことなどが考えられる。では，つぎに学校生活，環境を振り返って見よう。

九州大学は教養部と学部にわかれており，教養部課程 1 年半，学部は残り 2 年半となっている。

両学部ともきわめてその環境は良くない。その一例としてジェット機の騒音が取り上げられる。板付基地がすぐ近くにあるために実にすごいものである。基地を除くか九州大学が移転するかしないと解決できない問題である。土木建築技術で防音教室を作ってみたものの，さし

たる効果もない。学部に進学してしばらくはこのジェット機の爆音は気になるが，じきに免疫ができ，その環境に慣れてしまうのであるが，しかし，その害が目に見えて現われないからと，改善の必要性を認めないのはもってのほかで，より良い，環境に改善することが必要であろう。

他の国立大学においても五十歩百歩であろうが，われわれの土木系学科の中で古い伝統を持つ土木工学科は，その施設もほとんど昔の古いものである。実験室等今にも天井が今にも落ちてきはしまいかと思われるほどのオンボロである。しかし，そこで幾多の優れた実験がなされてきたのである。水工土木科では，新館が続々と増築されつつあり，将来名実ともに九大の水工と天下に目負しうるべく，師弟一丸となって努力している。

取得単位数は工学部第一位であり，毎日「よく学び，よく遊べ」のモットーの下で頑張っている。

各大学がライバル意識に燃えるということは大変結構なことと思う。使命感をがっちり受け止め，国を豊かにしようという意識をわれわれを持ち，10 年，20 年先にこの決意が実を結ぶことを信じている。

全学生必読の書

土木材料実験指導書	B 5 判　90 ページ	データーシート付	定価 **380** 円（〒70 円）
土質実験指導書	B 5 判　65 ページ	データーシート付	定価 **250** 円（〒60 円）

COASTAL ENGINEERING IN JAPAN, 1965

標記の図書が新しく土木学会より刊行されました。本書には最近のわが国の海岸工学研究の状況を紹介した論文 11 点が英文で集録されておりますので，海岸工学の現況を知るのみならず，英文で論文をまとめるうえにも貴重な参考書となることを確信し，ご一読をおすすめします。

体　　裁：B 5 版　151 ページ　　口絵写真　2 ページ

定　　価：1 200 円（US ドル）　　送料：100 円

改訂第2版第5刷出来

吉町太郎一著

鋼橋の理論と計算

総論　単構橋の応力解析　鈑桁橋および I 桁橋の設計——

単構橋の設計——桁の横振動と衝撃——構脚橋と高架鉄道——

突桁橋——連続桁橋——ラーメン橋——拱橋——吊橋——可動橋

附　録——鋼道路橋設計示方書

B 5 判　724 頁　**挿入図** 850　**定価 3,000 円**

東京神田駿河台下　**石崎書店**　振替東京 79048

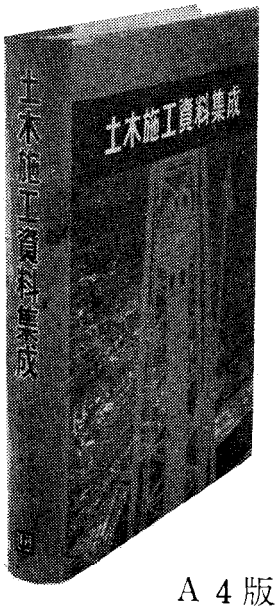
土木施工資料集成

■進歩の激しい今日、建設技術者が新技術を身につけるための貴重な経験資料の集積の書
〈東京大学教授・工学博士　本間　仁〉

■お世辞でなく良い本、土木工学書の中の一大ヒットだ、集録は要領よく安価にまた驚く
〈東京大学名誉教授・工学博士　福田　武雄〉

■土木施工全般に亘り最新の資料を詳細に整理編纂した本書は多忙な現場技術者の必携書
〈建設省大臣官房技術参事官　小林　元椽〉

■世界に誇る技術の一里程標、土木界の第一人者を総動員し施工の諸問題を網羅した好著
〈社団法人土木学会会長・工学博士　岡部　三郎〉



A 4 版
552頁　上製函入
定価 3,500円

監修者
伊藤令二
大石重成
金子柾
種谷実
中安米蔵
藤森謙一

編集委員
石川豊
内田寿雄
大串満馬
春日屋伸昌
片平信貴
久宝雅史
古賀雷四郎
後藤正司
徳平淳
友永和夫
比留間豊
福田秀夫
山田順治
八十島義之助
矢野信太郎
矢野義男
吉越盛次

東京都新宿区坂町25番地
電話 (353) 4631～5
振替口座　東京　173401

株式会社彰国社